2010年７月６日

博士学位論文審査報告書

大学名　　早稲田大学
研究科名　　人間科学研究科
申請者氏名　　菅谷　渚
学位の種類　　博士（人間科学）
論文題目　　過敏性腸症候群における不安と生理的反応の関連

論文審査員　主査　早稲田大学教授　野村　忍　博士（医学）（東京大学）
副査　早稲田大学教授　嶋田　洋徳　博士（人間科学）（早稲田大学）
副査　早稲田大学教授　熊野　宏昭　博士（医学）（東京大学）
副査　早稲田大学教授　鈴木　伸一　博士（人間科学）（早稲田大学）

過敏性腸症候群（irritable bowel syndrome：IBS）は，腹痛と便通異常を中心とする症状が慢性再発性に持続する機能性疾患である．IBSの発症と悪化において心理的要因からIBS症状の発生に関わる生理的反応への影響は重要である．IBSを伴う者において強い不安感情あるいは不安障害の高い併存率が認められ，特性的な認知的側面である不安感受性も強いことが示されている．また，不安感情との関連が報告されている視床下部-下垂体-副腎（hypothalamic-pituitary-adrenal: HPA）系が腹部症状に影響を与えることが示唆されている．本論文は，不安感情とそれに関わる認知的側面を含む心理的過程を不安と定義し，それがHPA系の指標である副腎皮質ホルモンおよび腹部症状を含む生理的反応にどのように関わるかについて検討したものである．

第１章では，IBSの診断基準・症状・疫学，心理・生理的要因について概説した上で，先行研究から導き出される仮説的モデルを示して本論文の目的を述べた．

第２章では，IBSにおける不安の認知的側面（不安感受性および症状に関する認知）と不安感情の心理的過程を検討した．研究１では，一般の学生におけるIBS症状を持つ者を対象に質問紙調査を行い検討した．その結果，不安感受性はIBS症状に関する認知のうちコミットメント，影響性・脅威性の評価と関連し，それらのIBS症状に関する認知は不安感情の強さに関わっていた．一方，生活に支障をきたすレベルの不安感情を反映した指標として回避行動の有無も確認し，回避行動の併存はIBS症状に関する認知および不安感情と関連しており，症状に関する認知が不安感情の重症化において重要であることが確認された．また，不安感受性→症状に関する認知→不安感情のモデルの妥当性の確認したところ，高い適合度が得られた．研究２では，研究１で確認されたモデルが不安障害の臨床群にもあてはまるかどうかを検討

するために，その代表であるパニック障害患者におけるIBS群を対象に質問紙調査を行った．その結果，IBSを伴うパニック障害患者において不安感受性の構成要素である身体症状に対する恐怖の強さと予期不安の強さが認められ，身体症状に対する恐怖はIBS症状に対するコントロール可能性の低下に関わり，そのコントロール可能性の低下はパニック発作の予期に伴う不安感情である予期不安の強さに関連していた．さらに，予期不安の強さを示したIBSにおいて広場恐怖の併存率の高さが認められ，IBSにおける予期不安と広場恐怖の重症度の有意な相関も認められたことから，IBS症状に関する認知によって強められた予期不安は回避行動を伴うような生活支障度の強いレベルに至る可能性が示唆された．研究１および２の結果をまとめると，不安の重症度に関わらず，不安感受性→IBS症状に関する認知→不安感情というモデルが適用できる可能性が示された．また，不安の重症度により，どのようなIBS症状に関する認知が不安感情に関わるかが異なる可能性も示唆された．

第３章では，第２章で扱った不安およびそれに関連する認知が副腎皮質ホルモンであるコルチゾールおよびデヒドロエピアンドロステロン[dehydroepiandrosterone: DHEA]（あるいは硫酸基結合型 DHEA[DHEA-S]）および腹部症状に与える影響について検討した．まず研究３では，大学生を対象に，８日間の唾液採取および腹部症状に関する日記の記入を依頼し，副腎皮質ホルモンと腹部症状との関連を検討した。その結果，コルチゾールの反応性の大きさと DHEA-S の反応性の小ささおよびベースライン値の低さが腹部症状を引き起こしている可能性を示した．さらに研究４では，大学生を対象に，ストレス負荷（スピーチ課題など）を行い，不安感情が喚起される状況での IBS における副腎皮質ホルモンの特徴と，その状況に対する認知と副腎皮質ホルモンの関連を検討した．その結果，不安感情を喚起させる状況に対する脅威やそれに対する挑戦という心理状態と副腎皮質ホルモンの相関が高いことが示された。IBS においては，日常生活上で不安感情が惹起されるような腹部症状が生じる状況など，本人にとって脅威的でどうにか対処しなくてはならない状況に直面した際に，コルチゾールは高く，DHEA（あるいは DHEA-S）は低いというバランスになりやすく，さらに腹部症状を悪化させる可能性が考えられた．

第４章では，以上の４つの研究結果を総合して，IBS における不安と生理的反応の関連について論じた．IBS において特性的な不安感受性の強さが IBS 症状に関する認知に影響を与え，その認知が不安感情を強めるという心理的過程を示し，さらに症状に関する認知の特徴が腹部症状の悪化に関わる生理指標を変化させる可能性を示唆した．

なお，本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下のとおりである。

[1] 菅谷　渚・貝谷久宣・熊野宏昭・野村　忍：過敏性腸症候群を伴うパニック障害患者の臨床的特徴, 心身医学, Vol.45,No.12, pp.915-922(2005)

[2] 菅谷　渚・井澤修平・大内佑子・城月健太郎・山田クリス孝介・小川奈美子・長野祐一郎・野村　忍：　過敏性腸症候群における心理社会的ストレスに対する副腎皮質および自律神経反応, 心身医学, Vol.47,No.12, pp.1013-1022(2007)

[3] Sugaya, N. and Nomura, S.: Relationship between cognitive appraisals of symptoms and negative mood for subtypes of irritable bowel syndrome, *BioPsychoSocial Medicine*, Vol.2, No.9, pp.1-6(2008)

[4] Sugaya, N., Kaiya, H., Kumano, H. & Nomura, S.: Relationship between subtypes of irritable bowel syndrome and severity of symptoms associated with panic disorder, *Scandinavian Journal of Gastroenterology*, Vol. 43,No.6, pp.675-681(2008)

[5] Sugaya, N., Izawa, S., Ogawa, N., Shirotsuki, K., Kobayashi, H., Yamada, CK., Tsumura, H., Nomura, S. and Shimada, H.: Effect of day-to-day variations in adrenal cortex hormone levels on abdominal symptoms, *Biopsychosocial Medicine*, Vol. 4, No.2, pp.1-7(2010)

本論文は，過敏性腸症候群（IBS）の心理的側面と生理的反応との関連を研究したものであり，認知行動療法アプローチを行う際の基礎的データを提供するものである。これらの研究成果は，上記の専門的学術誌に掲載され引用件数も多くまた学会賞を受賞するなど内外から高く評価されている。

以上の結果より，本審査員会は，菅谷　渚氏の学位申請論文「過敏性腸症候群における不安と生理的反応の関連」は，博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上